

## 令和5年度 第1回伊丹市総合教育会議 議事録

1. 日 時 令和5年6月30日(金) 午後3時30分～午後5時10分
2. 場 所 伊丹市役所戦略会議室(本庁舎3階)
3. 出席者 市長 藤原保幸  
教育長 木下誠  
教育委員 太田洋子、二宮叔枝、瀧川光治、西岡奈美
4. 事務局 総合政策部政策室
5. 傍聴者 2名
6. 次第
  - (1) 開会
  - (2) 市長あいさつ
  - (3) 議題
    - ① ICT教育の現状と成果について
    - ② 生成AIの学校現場での利用に関する今後の対応について

### 【市長あいさつ】

(市長)

「尊敬する皆様、ご参加いただきありがとうございます。私たちの教育行政をより良くするために、伊丹市総合教育会議を開催することを心から嬉しく思います。この会議は、伊丹市長と伊丹市教育委員会の委員が一堂に会し、教育に関する率直かつ闊達な意見交換を行う場です。今回の会議では、重要なテーマである「伊丹市におけるICT教育の現状と成果」と「生成AIの学校現場での利用に関する今後の対応」を中心に議論を行います。また、子どもたちが急速に普及する生成AIや、他の技術をどのように活用していくべきかについても、重要な議論を行いたいと考えています。私たちは、子どもたちが持つ可能性を最大限に引き出し、豊かな未来を築くために、教育に力を入れています。そして、皆さんがお持ちの経験や知見を共有し、協力しながら、より良い教育環境を作り上げていきたいと思っております。この会議を通じて、新たなアイデアや解決策を見つけ出し、実行に移していくことが大切です。皆さんの積極的なご意見やご提案をお待ちしております。改めて、ご参加いただきありがとうございます。素晴らしい会議の開催に向けて、共に取り組んでまいりましょう。よろしくお願いいたします。」

これはチャットGPTに、伊丹市総合教育会議の冒頭の伊丹市長の挨拶を1分程度で作るよう指示して作成されたもので、それなりによくできている。人類が誕生して以来、狩猟採集の生活から、農耕生活、定住生活と進化を続け、その間、生産の基盤となるのは、人間の腕力であり、筋力であり、考えるのは人間の脳であった。それが長く続いた後に大きく変化したのが18世紀後半の産業革命であり、蒸気機関や電気が発明され、生産性や効率性は大きく高ま

ったが、この時代も考えるのは人間であった。技術の力は変わったけれども、考えることは人間にしかできななかったが、それが今、そうではなくなってきた。例えば、電卓は計算をする道具で、考える力はなかったが、今では、将棋やチェスなどコンピューター自らが考えるようになり、コンピューターが人間に勝つようになってきた。昨年には、チャットGPTが現れ、人類が始まって以来、初めて、人間の考える力が機械に置き換わってきて、人間とは何をするのかが問われている。人類始まって以来の新しい局面に差し掛かっているのではないか。時代の転換期であることは間違いない。子どもたちは、この状況をどう乗り越えて成長していくのか。そのために、どのような教育環境が必要なのか等について意見交換を行いたい。

### 【議題①：ICT教育の現状と成果について】

[資料をもとに教育長から説明]

(教育長)

令和元年度を「情報化元年」と位置付け、情報化推進計画を策定し、1000台のタブレット端末を配置した。令和2年度には、新型コロナウイルス感染症対策として、全国一斉の臨時休校が行われ、子どもたちは様々な影響を受けた。しかし、マイナスなことばかりではなく、国のGIGAスクール構想が前倒しされ、一人1台のタブレット端末の配置やネット環境の整備など、教育の情報化が一気に進んだ。また、ハード面の整備と合わせて、ソフト面の整備として、教職員のICT指導力の向上を目指したICT支援員の配置や、情報担当指導主事によるアウトリーチ支援を実施した。子どもたちは、個別学習や協働学習、一斉学習などにおいて、学びの道具として自然にタブレット端末を使えるようになっており、子どもたちの対応力の高さに驚くばかりである。子どもたちの様子を動画でご覧いただきたい。

[「児童生徒の活用風景」の動画視聴（総合教育会議資料スライド3ページ）]

計画的に様々なことに取り組んできたことで成果もはっきり現れている。令和4年度の全国学力・学習状況調査において、タブレット端末の使用頻度が全国平均を大きく上回り、教員のICT活用指導力も全国より高い状況である。全国学力調査では、平成20年と比較して、平均正答率、無回答率、学力低位層のいずれの項目でも向上、改善がみられる。

(市長)

伊丹の教育、学力が向上していることは素晴らしいことだ。ただこれはICT教育の結果だといえるのか。ICT教育以外にも、色々な効果が相まって向上しているのではないか。

(教育長)

ICT教育だけではなく、例えば読書指導員や学力向上支援員、不登校対策支援員の配置や地域での土曜学習など、様々な取組みの総力で学力が上がった。ICT教育の成果としては、タブレットを使うことにより、協働的な学習で表現力が増したことや別室学習や家庭学習で授業を配信することが可能となり、教育の機会を提供することができた。また、AIドリルなど家庭の経済状況に関わらず、自分のペースで学習できる環境が整ったことが挙げられる。

(西岡委員)

子どもがタブレットを使うようになり、パワーポイントで資料を作成する力とそれを利用して発表するプレゼン力がついたと感じている。タブレットを活用したプレゼンにより、人の意見と自分の意見がどう違うのかを効率的に比べることができるので文章を作る力もついている。保護者としては、子どもたちがデジタルネイティブとして使いこなせるようになることに期待している。

(市長)

ICT技術が有益であることは間違いないので、教育現場でどのように使うかというルール化が必要ではないかと考えるが、いかがか。

(太田委員)

小学校・中学校に視察に行くと、タブレットは学校の中では当たり前ツールになっている。学力調査の項目にも入っているので、今後、しっかり検証していく必要がある。教員がICTを使って、新しいものが生み出せるような環境の中で、子どもたちの新しい時代に対応する力が育つのではないかと考える。ICTが学校のデジタル化を進め、スマートな学校になり、教員も働きたいと感じる夢のある学校になることを期待する。

(市長)

学校現場のデジタル化はどこまで進んでいるのか、伺いたい。

(太田委員)

一部でデジタル化を導入しているが、出席簿などアナログな部分もまだ多い。

(教育長)

働き方改革の視点からも、鍵を握るのはICTだと考える。現在も校務支援システムを導入しているが、更なるデジタル化を進め、事務の効率化を図り、時間外勤務の縮減につなげていく。また、校務支援システムは、職員室の有線では繋がらないので、例えば自分の教室、自分の学級、或いはクラウド上で使えるようになると、校務の効率化が図られるので、環境整備を行っていかねばならないと考えている。

(西岡委員)

子どもや先生の様子を拝見していて、デジタルとアナログが混在し、結果的にアナログだけよりも、より労力がかかっている状況だと感じている。

(瀧川委員)

教員養成の現場では、2年ほど前にICT機器の活用と教育という科目が新設され、これから学校現場に出ていく教員は活用できる力を備えているが、学校現場ではそれを活かす環境が整っていない。教材研究の中にICTを組み込んでいくことが必要である。令和4年度の取組みが反映される令和5年度の学力調査の結果により、学校の教員のICTを活用した更なる授

業力向上について課題がみえてくる。

(市長)

教員のICT活用能力の向上は難しい部分もあると考えるが、いかがか。

(二宮委員)

教員のICT教育に対する積極的な姿勢が子どもたちの成果につながっていると感じている。ICTは一つのツールであって、これからの時代は、当然使えなければならないものである。教員の意欲的な姿勢には期待ができる。

(教育長)

ICT教育の課題は、より活用しやすくすることである。教員が時間外勤務を短縮するためのシステム改修や、子どもたちにとっても、教科ごとにID、パスワードが違うので、1つのID、パスワードで全ての教科を利用できるシステム環境の整備が必要であると考えている。

(西岡委員)

私は子どもたちに、パスワードノートを作るように言っていて、何かIDを作った時は、そのノートに記録して、そのノートは一生使うつもりで管理するように伝えている。ID、パスワードはいくつもあり、毎回ログインするのに時間を要しているのだから、それが一つになれば、とても良いことだと考える。

(太田委員)

現状は過渡期であり、教員のシステムも子どものシステムも、随時新しいシステムが開発されているので、状況を注視しながら、効果的なシステムを導入して、子どもたちの多様性に対応した未来の学校づくりを進めていきたい。

(市長)

マイナンバーカードをはじめとしたデジタル技術により、今後、家庭環境や成績など子どもに関する情報を集約することが可能となるかもしれないが、そのようになれば、きめ細やかな指導ができるという反面、どこまで教員が知り得ていいのかという議論も出てくるだろう。価値観に変化が生じる大変な時代であるが、適切にICT教育を推進していただきたい。

## 【議題②：生成AIの学校現場での利用に関する今後の対応について】

(市長)

まず、伊丹市、伊丹市教育委員会、国、それぞれがデジタル社会を目指していく中で、学校教育で、どのような子どもたちを育てていくのか。現在の学習指導要領でのICT教育の位置づけを説明いただきたい。

(教育長)

学習指導要領においては、学習の基盤となる資質・能力として、情報活用能力を位置付けて

おり、言語活動の充実とともに情報活用能力の充実が示されている。新たな技術である生成A Iをどのように使いこなすのかという視点や、自分の考えを形成するために活かすといった視点も重要であるという文部科学省の見解は重要であると考えている。

(市長)

具体的に何の授業で行っているのか、伺いたい。

(教育長)

学校現場では、まだ、生成A Iについての授業を行っていない状況である。

(市長)

生成A Iが非常に有用であることは間違いないが、いかに使いこなすか、真偽を見抜く力をつけるのかということが、デジタル時代の基礎的素養であり、学校教育の一つとして必要であると考えているが、いかがか。

(西岡委員)

そのとおりである。生成A Iは、始まったばかりで、子どもはもちろん、保護者も含めた市民に対しての啓発が必要であると感じている。

(教育長)

文部科学省から生成A Iの利用に関するガイドライン案が示された。まず教師が使った上で、学習に取り入れ、生成A Iが提示した内容が正しいかどうかについて、吟味する力、批判的思考力を培うことが必要であると考えている。

(瀧川委員)

大学では、実際に使ってみて、誤った情報もあるということ認識したうえで、だからこそ使い方が重要であること、吟味することの必要性を伝えている。大学生だから、できることかもしれないが、中学生、小学生、それぞれに合った手法で気づかせる授業が必要だと考える。

(市長)

生成A Iに触れる前に、使い方や注意すべきポイントを授業でしっかりと伝えることが必要だと考える。普段、教科書や正しいことが表示される前提で利用されているタブレットであるが、生成A Iが提示する内容には明らかな虚偽や事実誤認が含まれるということを教えなければならぬ。

(教育長)

チャットGPTや他の生成A Iを使わずに避けていたら、批判的思考力は培えない。だから、まずは使ってみる。使ってみて、鵜呑みにするのではなく、これが本当に正しいかどうかを常に吟味する。そういう習慣を身につけることが大事だと考える。

(市長)

具体的に学校現場で、どうするか伺いたい。

(太田委員)

学校現場では、携帯スマホの使い方講座や、いじめに使ってはいけないこと、SNSで拡散させてはいけないこと等を指導している。やはり授業の中で位置付けることは必要であると考えるので、そのために教員に対応力をつけてもらいたい。

(市長)

どの授業で行っているのか、伺いたい。

(太田委員)

特別活動的な授業や道徳的な授業で行っている。中学校では、技術の教科の中に情報という分野があり、技術の教員が対応している。また、保護者への啓発として、学校からのプリントやグーグルクラスルームでのお知らせ、コミュニティ・スクールの活用など、様々な手段・場面で行っていくことが必要と考える。

(西岡委員)

家庭での対応には差があると考えるので、保護者への啓発でモラルを高め、家庭でのルール作りの必要性を感じている。

(市長)

チャットGPTや他の生成AIが便利であることは間違いなく、だからこそ使い方に気をつけなければ危ない状況となる。将来的には、生成AIが当たり前になるデジタル社会で、子どもたちには、生成AIの限界や問題点を把握して、使いこなすスキルを身につけて成長してほしいと考える。

(二宮委員)

使いながら試してみて、トライアンドエラーでエラーもあり得るということを体感することが大切であると感じている。私は冒頭の市長の挨拶は市長らしくなく、違和感を感じていた。批判的思考も重要であるが、自分の考えを持ち、自分の中で腹落ちするかを考えることが大切だと考える。生成AIの技術が更に進歩しても、自分の感性を大切にし社会の中でより良く生きるという、学校教育の根本が問われていると感じている。

(市長)

これまで私のスピーチを何回か聞いている方は、冒頭の挨拶に違和感を持っていただき、非常に有難い。チャットGPTで作成した文章は、個性がなく通り一遍の内容で、当たり前のことは書いてくれるが、その人らしさ、個性までは出せない。このようなところについては、チャットGPTの限界も示していると感じている。今後のデジタル時代を生きぬく子どもたちには、小さいときから、生成AIの問題点を理解し、自分の頭で考えて自分の言葉で話す能力を

身につけていくことが必要で、それを教育の中で行う必要を感じている。

[資料をもとに教育長から説明]

(教育長)

5月16日の中央教育審議会の特別部会で、生成AIの学校現場での利用に関する今後の対応について、批判的思考力と創造性への影響、個人情報や著作権保護の観点からのリスク整理の必要性など、様々な議論や懸念があることが示された。その一方で、情報活用力の重要性や自分の考えを形成するために活かすという視点も大事であるという見解が示された。これをもとに、文部科学省が7月の初めに、生成AIのガイドラインを示す予定であるので、そのガイドラインを吟味し、市のガイドラインを作成し、子どもや保護者に周知徹底したいと考えている。

(市長)

例えば、読書感想文などで、チャットGPTや他の生成AIを使っているかどうか、教員は判断がつくものか。

(瀧川委員)

教員がチャットGPTにより作成した文章かどうかを判断するためには、教員が子どもと向き合う時間を確保する必要があると考えている。大学業界で、数年前に卒論代行業者の存在が報道されたが、それを見抜けない大学教員とは一体何なのかと感じた。普段から学生と卒論指導をこまめに行っていれば、この文章はその学生本人の文章か違う人物が書いた文章かがわかるはずである。学校現場でも担任する子どもたちがどういう文章を書くのか、どういう思考パターンを持っているのかということを教員が把握する力を持たなければならないと考える。教員が子どもと向き合う時間を確保するために、ICTをどう活用するかが重要で、チャットGPTを使って書かれた読書感想文があったとしたときに、それを見過ごしてしまうようなことが、あってはならないと考える。

(市長)

二宮委員が冒頭の私の挨拶を市長らしくないと発言されたが、長年の付き合いの中で、何回も私のスピーチを聞いていて、違和感を感じられた。教員は子どもたちとの日々の関わりや過去の指導の過程から、子ども自身が作成した文章とチャットGPTにより作成した文章との違和感に気づき、注意して指導することが本来の姿であると考えている。

(太田委員)

本日議論された課題は、過渡期であり、今後どう進めていくべきかという問題で、様々な視点から議論でき、有意義であったと感じている。教育委員会でも、更に議論を深めていきたいと考える。

(二宮委員)

やはり自分というものを持つことができる教育が一番大事であると考えている。批判的精神もさ

ることながら、先ほども申し上げたが、腹落ちするということ、自分の中で納得することが肝心である。感じ取るという感覚が必要だと考える。自分が何をしたいくて、どう思っているのかといった自分を作り上げていくことが、教育の目指すべきところであり、希望だと感じている。

(市長)

人間とは何であるのか。チャットGPTでは最もらしいものを生成できるが、所詮、それだけの話であり、人間としての独自性、オリジナリティーをそれぞれの人が持つことの大切さを子どもたちに理解してもらおうこと、それが教育であるべきだと考える。

(教育長)

ICTはこれからの時代の重要なツールであり、教育のDXを進めることは必須である。現状だけでなく将来を見据えて、新しい技術が出てきたら、ポジティブに取り入れ、使ってみる、使う中で課題を見つけ、それを常に改善していくことが、教育にとって重要であると考え

(市長)

教育委員の皆さんには、生成AIを含めて、変化していく環境の中で、自分を見失わず、使いこなせるような人間に子どもたちを教育していただきたい。